375.9
Se11
資料室

41846
教科書文庫
4
817
42-1912.
20000
26443

資料室
3759
Se11

明治四十五年一月二十三日
文部省檢定濟

文學博士關根正直
古谷知新共著

女子文法教科書

東京
大阪寶文館藏版

廣島大學
教
26443
圖書

女子文法教科書下卷　目次

目次

第一章　動詞活用の名稱其一……一
練習(一)……四
練習(二)……四
第二章　動詞活用の名稱其二……五
練習(一)……七
練習(二)……七
第三章　動詞活用の名稱其三……八
練習(一)……九
練習(二)……一〇

第四章　形容詞活用の名稱……一〇
注意……一二
練習……一二
第五章　助動詞活用の名稱……一三
注意……一六
第六章　動詞と助動詞との連續……一六
一　未然形に連る助動詞……一六
注意……一八
二　連用形に連る助動詞……一九
注意……二〇
三　終止形に連る助動詞……二〇
四　連體形に連る助動詞……二一

五　未然形及已然形に連る助動詞……二二
練習……二四
第七章　體言及用言と助詞との連續……二五
一　體言附屬の助詞……二五
注意……二八
二　用言附屬の助詞……二九
注意(一)……三〇
注意(二)……三二
練習……三二
第八章　體言と用言との關係……三三
主語　述語　客語……三三
練習……三六

第九章　修飾語……三七
練習……三八
第十章　獨立語……三九
練習……四〇
第十一章　單文……四〇
練習……四二
第十二章　重文　合文……四三
練習……四四
第十三章　複文……四五
練習(一)……四七
練習(二)……四七
第十四章　文の成分の節略……四八

練習……四九
第十五章　文の性質……五〇
練習……五三
附錄
動詞活用表
動詞と助動詞との連續表

下卷目次終

帝國大學圖書之印

女子文法教科書下卷

第一章　動詞活用の名稱（其一）

動詞の活用にはおのおの意義あり、名稱あり。いま六種の活用形を有する奈行變格活用の動詞につきて、これを説明すべし。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(死)な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

第一の活用形なる「死な」は「ば」に接して「死なば歎かむ」の如く、

未定の事を條件としていふ形なれば未然形といふ。

第二の活用形なる「死に」は「死におくる」「死に損ふ」の如く、用言に連る形なれば連用形といふ。

第三の活用形なる「死ぬ」は「人死ぬ」の如く、いひ終る形なれば終止形といふ。

第四の活用形なる「死ぬる」は「死ぬる人」「死ぬる時」の如く、體言に連る形なれば連體形といふ。

第五の活用形なる「死ぬれ」は「ば」または「ども」に接して、「人死ぬれば萬事休す」「身は死ぬれども名は朽ちず」の如く、已に定まれることを條件としていふ形なれば已然形といふ。

第六の活用形なる「死ね」は「潔く死ね」の如く命令をあらはす形なれば命令形といふ。

口語にては「ぬる」を失ひて終止連體一形となり、「ぬれ」を失ひて已然命令一形となれり。

以上説明せる未然形、連用形、終止形、連體形、已然形、命令形の六種の名稱は、あらゆる動詞の活用に附することを得。

加行變格佐行變格の兩動詞は活用形五つあり。然して其第一の活用形にて未然形と命令形とをかねたり。

	未然形 命令形	連用形	終止形	連體形	已然形
(來)こ	き	く	くる	くる	くれ
(爲)せ	し	す	する	する	すれ

佐行變格の命令形は「せよ」と「よ」を添へて始めて用をなす。加

行變格の命令形もまた通例「よ」を添ふ。

口語にては、孰も「く」「す」を失ひて、終止連體一形となれり。

練習(一)　次の文中圏點を施せる動詞の活用の名稱をいへ。

一　恙く歸りこよ。

二　春はくれども花咲かず。

三　餓死せむよりは戰場に死ね。

四　この氣風は二千年來涵養し來れるものにして、實に我國の誇とする所なり。

練習(二)　次の文中の口語を文語に改めよ。

一　終日勉強をする。

二　死ねば心配もない。

三　午前の訪問を全廢する。

四　死ぬ時は立派に死にたい。

第二章　動詞活用の名稱(其二)

上二段活用下二段活用の動詞は四つの活用形あり。而して其第一の活用形にて、未然、連用、命令の三形をかねたり。

未然形 連用形 命令形	終止形	連體形	已然形
(起)き	く	くる	くれ
(建)て	つ	つる	つれ

上二段下二段兩活用ともに、命令形には「起きよ」「建てよ」の

如く「よ」を添ふ。

上一段活用下一段活用の動詞は、たゞ三つの活用形あるのみ。而して其第一の活用形にて、未然、連用、命令の三形をかね、第二の活用形にて終止連體の二形をかねたり。

	未然形 連用形 命令形	終止形 連體形	已然形
上一段	着き	きる	きれ
下一段	蹴け	ける	けれ

上一段下一段兩活用ともに、命令形には「きよ」「けよ」の如く「よ」を添ふ。

口語にては、上下二段活用は上下一段活用となる。上下一段活用は口語文語ともに相同じ。

練習（一） 次の文中圏點を施せる動詞の活用の名稱をいへ。

一　夕陽山の端に殘影をとゞむる頃、顧みがちに別れ行きぬ。

二　見給ふ如く、今は氷雪閉ぢ果てて外面に出づることもかなひがたし。

三　庭園を構へ盆石を飾りて、常に見ることを得ざる自然の景を、家居の中に眺むるものなり。

練習（二） 次の文中の口語を文語に改めよ。

一　秋高く馬肥える時。

二　木によつて魚を求める。

三　吹きあげる風の音がきこえる。

四　一年の計は穀をうゑるにある。

第三章　動詞活用の名稱（其三）

四段活用の動詞には、四つの活用形あり。然して其第三の活用形にて終止連體の二形をかね、第四の活用形にて已然命令の二形をかぬ。

未然形	連用形	終止形 連體形	已然形 命令形
（咲）か	き	く	け

四段活用は口語文語相同じ。但し口語の未然形は、たゞ助動詞にのみ連なりて「咲かぬ」「咲かない」など用ひられ、已然形

は却つて未然形の如く用ひらる。

良行變格活用の動詞も、また四つの活用形あり。然して四段活用に異る點は、第二の活用形にて連用終止の二形をかぬるにあり。

未然形	連用形 終止形	連體形	已然形 命令形
（有）ら	り	る	れ

良行變格活用は、口語にては四段活用なり。

練習（一）　次の文中の動詞活用の名稱をいへ。

一　夜にいれば氷の如き玉兎躍る。

二　空行く心地して蹈む足も定まらず。

三　眠り居る母に默禮して街頭に出で行く。

四　世に富士の嶺を望むところ多くあれども、此處の眺にまさるものはなし。

練習(二)　次の文に誤あらば正せ。

一　惡疫流行して死す者多し。

二　汽車の時間に後る時は一大事なり。

三　事こゝに及びては、斃る處まで行くよりほかなし。

第四章　形容詞活用の名稱

形容詞の活用もまた動詞の活用と同じく、各段の名稱あり。但し形容詞は命令形を有せず。

未然形　連用形　終止形　連體形　已然形

(近)く　し　き　けれ

第一の活用形なる「近く」は「ば」につゞきて「海近くば行かむ」の如く未然形をなし、また用言に連りて、「近くなき處なり」の如く連用形をもなす。

第二の活用形なる「近し」は「海近し」の如く終止形をなす。

第三の活用形なる「近き」は體言に連りて「近き處に海あり」の如く連體形をなす。

第四の活用形なる「近けれ」は「ば」「ども」につゞきて「海近ければ避暑に適す」「海近けれども波の音は聞えず」の如く已然形をなす。

「しく」「しき」「しけれ」と活用する「樂し」「嬉し」等の形容詞の終止形

は「遊ぶは樂し」「君に逢ふは嬉し」の如く「し」の音を重ねざるが普通なり。

注意　「シク、シ、シキ」活用ノ終止形ヲ、「アシシ」「イサマシシ」ナド用フル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。（文法上ノ許容）

練習　次の文中の形容詞活用の名稱をいへ。

一　人遠き慮なければ必ず近き憂あり。

二　人の騷ぎ罵るさまいとものすし。

三　このまゝ朽ち果てむは口惜しきこと限なし。

四　雪舟とて畫を善くする者あり。

五　何の興味もなければ、何の情趣もなし。

六　交際あまり繁ければ、萬事につけてうるさきものなり。

第五章　助動詞活用の名稱

助動詞の活用も亦その活用形によりて各段の名稱あり。

一　動詞下二段活用に等しき助動詞

未然形 連用形 命令形	終止形	連體形	已然形
一　れ	る	るゝ	るれ
二　られ	らる	らるゝ	らるれ
三　せ	す	する	すれ
四　させ	さす	さする	さすれ
五　しめ	しむ	しむる	しむれ

二　動詞良行變格活用に等しき助動詞

	未然形	連用形 終止形	連體形	已然形 命令形
一	なら	なり	なる	なれ
二	たら	たり	たる	たれ
三	ざら	ざり	ざる	ざれ
四	(ら)	り	る	(れ)
五	(けら)	けり	ける	けれ
六	べから	べかり(べかる)		(べかれ)

三　形容詞の活用に類せる助動詞

	未然形 連用形	終止形	連體形	已然形
一	たく	たし	たき	たけれ
二	べく	べし	べき	(べけれ)
三	如く	如し	如き	

四　活用の特別なる助動詞

	未然形 連用形 終止形	連體形	已然形
	ず	ぬ	ね
	終止形	連體形	已然形
	き	し	しか

右のほかに、終止連體の二形のみ用ひらるゝ「む」あり。また終止形のみ用ひらるゝ「つ」「ぬ」の二助動詞あり。

上例中「ざり」には終止形なし。

「り」の未然形「ら」已然形「れ」及び「けり」の未然形「けら」等は

普通文には用ひられず。「べかり」も未然形連用形のほかは用ふることなし。又「如し」の已然形も用ひられず。

注意　過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體形ノ「シ」ヲ終止形ニ用フルモ妨ナシ。（文法上ノ許容）

第六章　動詞と助動詞との連續

助動詞は、專ら動詞に連續して、種々の作用をいひあらはす詞にして、獨立しては意味をなさざるものなり。

助動詞の動詞に連るには、その未然形に連るものと、連用形に連るものと、終止形に連るものと、連體形に連るものと、未然形及已然形に連るものとの五種あるなり。

一　未然形に連る助動詞

父に許さる。（受身）

姫君琴をひかる。（敬意）

世に捨てらる。（受身）

殿下歸朝せらる。（敬意）

「る」は四段活用、奈行良行兩變格の諸活用に連り、「らる」は上下二段、上下一段、加行佐行兩變格の諸活用に連り、ともに受身又は敬意をあらはす。

犬を打たす。（使役）

姫君琴をひかせ給ふ。（敬意）

塵を捨てさす。（使役）

殿下歸朝せさせ給ふ。（敬意）

花を折らしむ。(使役)

主上行幸せしめ給ふ。(敬意)

注意 「……セサス」ト云フベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ従フモ妨ナシ。

例 手習サス 周旋サス 賣買サス

「……セラル」ト云フベキ場合ニ「……サル」ト用フル習慣アルモノハ之ニ従フモ妨ナシ。

例 罪サル 評サル 解釋サル

「得シム」ト云フベキ場合ニ「得セシム」ト用フルモ妨ナシ。(文法上ノ許容)

「す」の連る動詞は「る」に同じく、「さす」の連る動詞は「らる」に同じ。「しむ」はすべての動詞に連る。然していづれも使役又は敬意をあらはす。

怪むに足らず。

信ぜざる者なし。

いづくにか行かむ。

「ず」「ざり」は打消の意をあらはし、「む」は豫定の意を示し、ともに一切の動詞に連る。

二 連用形に連る助動詞

御目にかゝりたし。

聲高く歌ひき。

今は昔、ある村に舊りたる祠ありけり。

母の面影によく似たり。

夜更けて人しづまりぬ。

雨はら〳〵と降り出でつ。

「たし」は希望の意、「き」「けり」は過去の意、「たり」「ぬ」「つ」は完了の意をあらはす。

「き」の連體形「し」は佐行變格活用に限り、連用形に連らずして未然形に接續す。（なほ加行變格との接續にも異例あり。附錄の表其二を見るべし）

注意　佐行四段活用ノ動詞ヲ、助動詞ノ「シ、シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナド云フベキ場合ヲ、「暮セシ時」「過セシカバ」ナドスルモ妨ナシ。（文法上ノ許容）

三　終止形に連る助動詞

明日は雨降るべし。（推量）

國法に從ふべきものなり。（義務）

萬里の波濤も越えば越ゆべし。（能力）

午前八時に出頭すべし。（命令）

ゆめ〳〵忘るべからず。

いまだ遠くは行くまじ。

「べし」は推量、義務、能力、命令等種々の意をあらはし、「べかり」は「べし」と「あり」と連合せるものにて、其意「べし」に同じく、「まじ」は否定の推量をあらはす。

「べし」「べかり」「まじ」は良行變格の動詞に限り、終止形に連らずして、連體形に接續す。

四　連體形（または體言）に連る助動詞

思ふことを書き續くるなり。

人の歎賞する所なり。

「なり」は動詞形容詞の連體形、もしくは體言に連り、指定する

意をあらはす。

五　未然形及已然形に連る助動詞

危難は既に過ぎ去れり。

彼はまたもや失敗せり。

「り」は四段活用の已然形と、佐行變格活用の未然形とに限りて接續し、完了の意をあらはす。

以上説明せるものゝほかに、

君は君たり。

の如く用ひらるゝ「たり」は、體言にのみ連りて、指定の意を示すものなり。

雲の如し。

花の散るが如し。

「如し」は「の」「が」の助詞を伴ひて、體言用言に接續し、（又「が」を省きて直に動詞の連體形に連る）比較の意をあらはす。

太政大臣關白たり。

「たり」は體言にのみ連りて、指定の意を示す。

水清からず。

其の名世に高かりき。

の如く用ひらるゝ「かり」は、形容詞の連用形に「あり」の連合して成れるものにて、良行變格の活用をなす。

各種の助動詞互に重り合ひて用ひらるゝ事あり。然して其接續におのづから一定のきまりある事、次の例によりて知

るべし。

容易に區別せられ(未然)ざる(連體)なり。

維新前後に破壞せられ(連用)たる(連體)なり。

幸にして觀客を失望せしめ(未然)ざり(連用)き。

練習　次の文中の助動詞の意義及び連續を說明せよ。

一　かくては大名の城下にはなるまじ。

二　山も崩され沼も埋められたり。

三　秋風は涼しくなりぬ。いざ野に行かむ。

四　ことしおほみゆきし給はむよし仰せいださる。

五　親しき友にわかれて、故鄕にたちかへれり。

六　その家甚だ富みたりければ、十分の教育を受けられたり。

七　陛下には文學の御たしなみ深くわたらせ給ひ、折にふれさせられての御歌など實にめでたし。

八　自然界の美を顯さむとするものは、須らくこの間の消息を考察せざるべからざるなり。

第七章　體言及び用言と助詞との連續

一　體言附屬の助詞

の　櫻の花。　汝の家。

が　梅が香。　君が代。

に　馬に乘る。　汝に問ふ。

を　花を觀る。
字を習ふ。
へ　東へ向ふ。
朝鮮へ行く。
と　花と月とによし。
青と黄とを合す。
より　山より下る。
海より深し。
まで　夜まで待つ。
此處まで來れ。
は　爲す者は常に成り、行く者は常に至る。
も　鳥もうたひ蝶も舞ふ。
のみ　憂ふべきはこれのみ。
か　霞か雲かはた雪か。

右は、いづれも體言に附屬する助詞なり。されどもまた用言にも連りて、

何ぞ思はざるの甚しき。
夢のさめたるが如し。
月を見るによろし。
夜の明くるを待つ。
疎きへもいひつかはす。
思ふと思はざると。
日の出づるより日のいるまで。
ありがたきは母の情なり。
行くもあり、かへるもあり。
能はざるにあらず、せざるのみ。
行くべきか。歸るべきか。

の如くも用ひらる。かく體言附屬の助詞に接する用言は、概ね連體形をなし、體言と同等に用ひらる。これを準體言といふ。

注意　助詞ノ「ノ」ハ動詞助動詞ノ連體形ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例　花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

語句ヲ列擧スル場合ニ用フル助詞ノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ、最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例　月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

（文法上ノ許容）

二　用言（助動詞も含む）附屬の助詞

このまゝに朽ち果てば、いかに悔しからむ。

吾今御身を失はば、何を樂に此世に生き殘るべき。

「ば」は用言の未然形に連り、前後相應ずる場合に用ふ。

老年に至りて悔ゆとも及ぶべからず。

水害を免れたりと聞く。

汝は音樂を學ぶや。

父母の恩を忘るな。

右はいづれも用言の終止形に連る。（但し「な」のみは良行變格

に限りて其連體形に連る。)然して「とも」は前後相應ぜざる場合に用ひ、「と」は接續に用ひ、「や」は疑問、「な」は禁止の意を示す。

いかに苦しくとも暫く堪へ忍ぶべし。

の如く、「とも」は形容詞の連用形に連ることあり。

注意　助詞ノ「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體形ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラルルトモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

助詞ノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及時ノ助動詞ノ連體形ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例　月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラルヽト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルト云フ。

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ。

(文法上ノ許容)

終日待ちけるが、遂に來らざりき。

定めて荒れたらむと思ひしに、たゞ庭前の松の倒れたるがあるのみ。

靜閑を以て名高かりしを、今は家多く立並びて其の風景見るべからず。

「が」「に」「を」は用言の連體形に接續する助詞にして、いづれも前後一致せざる場合に用ふ。

今日の危機をいかにするか。

死すべき時は今なるぞ。

閣下の任なほ重きかな。

「か」「ぞ」「かな」も亦連體形に接續す。然して「か」は疑問「ぞ」は指示「かな」は感動の意をあらはす。

「いつ」「いづこ」「いかに」等の疑問の詞上にあるときは「か」の助詞を用ひて「や」の助詞を用ひざるが常なり。

注意(二)上ニ疑ヒノ語アルトキニ、下ニ疑ヒノ助詞ノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例　誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

練習　次の文中助詞の接續に誤あらば正せ。(文法上ノ許容)

一　過激なる運動をするな。

二　出席せるや否を檢すべし。

三　汝はこの事を學びたるや。

四　適せるや否を考へざるべからず。

五　今は遁れぬところと覺ゆぞ。

六　汝はこの事を知れるや。

七　何故に養生し給はぬや。

八　みだりに手を觸るるな。

鳥鳴く。

第八章　體言と用言との關係

主語　述語　客語

風涼し。
我は愁ふ。
死は易し。

の如く、「鳴く」「涼し」「愁ふ」「易し」は、各その上なる事物を説明せる用言なり。かくの如く説明する用言を述語といひ、説明せらるゝ事物を主語といふ。主語は體言(もしくは準體言)なり。

(一)　鳥鳴く。
(二)　暴風　覆す。
(三)　教師　戒む。
(四)　毛蟲　成る。

上例にて、(一)はこのまゝにて意義分明なれども、(二)(三)(四)は述語のみにては其意完からず。

暴風船を覆す。
教師生徒を戒む。
毛蟲蝶となる。

の如く、動作の目的たるべき事物を加へて、始めて其意完し。かくの如く述語の意を完からしむる爲に用ふる體言を客語といふ。

彼は金錢を貧民に施す。

の如く、一の述語に對して、二或は二以上の客語ある事あり。語の順序は、主語第一位を占め、述語は最下に位し、客語は主語の下、述語の上におかるゝを通則とす。

こひし(述語)我が家の跡。(主語)

かへせ(述語)我が母を。(客語)

の如く、語の順序の倒置せらるゝは、歌謠美文等に多し。

練習　次の文中の客語を指摘せよ。

一　父財産を子に讓る。

二　筆は劍よりも鋭し。

三　河海は細流を擇ばず。

四　源實朝は公曉に殺されたり。

五　彼は刻苦して學問を修む。

六　利根川は一名を阪東太郎といふ。

第九章　修飾語

頑是なき稚兒は笑を含めり。

深綠色の波は、白雪の如き泡沫を飛ばす。

火は炎々と燃え出づ。

草木所え顏に生ひ茂る。

「頑是なき」「深綠色の」「白雪の如き」は文中の體言にかゝり、「炎々と」「所え顏に」は文中の用言にかゝりて、いづれも其意を一層明かに說明せるものなり。かゝる用をなす語を修飾語といふ。

體言にかゝる修飾語は、概ね形容詞の如き性質を有するを以て形容詞的修飾語と稱し、用言にかゝる修飾語は、專ら副

詞の如き性質を有するを以て、副詞的修飾語と稱す。

修飾語の位置は、形容詞的修飾語は體言の上におかれ、副詞的修飾語は用言又は述語の上におかるゝを常とす。

練習　次の文中の修飾語を指摘せよ。

一　蓮の花涼しげに咲き出づ。

二　綠の色深き夏木立は、春の花にも劣らず。

三　雲間に高き富士山は、皚々たる白雪を戴く。

四　うるはしき家の下は、鯉鮒の潛みたる淵なり。

五　我はすみ渡れる明月を、清き水に宿して見る。

六　無邪氣なる鷗の群は、この岸とかの波との間を翺翔せり。

第十章　獨立語

主語、客語、述語、修飾語は、いづれも文の成分なり。これらの成分と形の上に於て何等の關係なき別種の成分あり。これを獨立語といふ。

諸姉よ、諸姉は心の美人たらむと思はずや。

の「諸姉よ」の如く呼びかくる語は獨立語なり。

あゝ、われ何ぞ生を惜まむや。

の「あゝ」の如く感動をあらはす詞は獨立語なり。

英語は、余已にこれを學びたり。

の「英語は」の如く特に冒頭に掲出して、下に代名詞の「これ」に

て繰返せるは獨立語なり。

練習　次の文中の主語と獨立語とを指摘せよ。

一　瓢や瓢や、我汝を愛す。

二　君よ、君は何を憂へ給ふぞ。

三　あはれ不運の者どもかな。

四　すはや、敵兵おしよせたり。

五　あはれ、今年の秋もゆくなり。

六　大日本帝國は万世一系の天皇之を統治し給ふ。

第十一章　單文

風吹く。

霜白し。

船海に浮ぶ。

猫鼠を捕ふ。

上例は、いづれも主語と述語との關係の成立、唯一回のみのものなり。かくの如きを、文法上單文といふ。

あらき風、俄に吹きいづ。

大なる船、鏡の如き海に浮ぶ。

隣家の黑き猫、わが愛せる小鳥を捕ふ。

の如く、修飾語の有無多少は、文の單複に關係なきものなり。

余は庭に萩、桔梗、女郎花を栽ゑたり。

我は、師につきて、國語、家事、裁縫を學びぬ。

の如く、客語の多少もまた然り。

林子平、高山彦九郎、蒲生君平は、即寛政の三奇士なり。

の如きは、單語三つを一團の主語として、一の述語に連結せしめたるものにて、これまた單文なり。

練習　次なる單語に他の單語を添へて、各一の單文とせよ。

一　秋風　　二　菊

三　動物　　四　植物

五　教ふ　　六　勉強す

七　養ふ　　八　益あり

第十二章　重文　合文

鳥うたふ。

蝶舞ふ。

右の二つの單文を重ぬれば、

鳥うたひ蝶舞ふ。

となりて、一つの文となるべし。かくの如く單文の重なりたるものを重文といふ。

重文をつくるには、上文の述語の形を連用形に改めて重ぬるものとす。

(一)　鳥うたひ蝶舞ふ。

(二)　鳥うたはば蝶も舞はむ。

上例の(一)はたゞ二つの文の重りたるのみなれども、(二)は二つの文相合して新しき意義を有する文となれるものなり。かくの如く、二文相合して新意義を生ずるものを合文といふ。

合文をつくるには、上文の述語に「ば」「ど」「ども」「とも」「が」「に」「を」等の助詞を接續せしむるものとす。

練習　次の文は、單文重文合文のいづれに屬するか。

一　帆前船見え汽船走る。

二　海鳥この島に群居す。

三　予は切に忠告せしが、彼は遂にきかざりき。

四　木曾義仲は、粟津が原の露と消え、平家の一門は西海の波に漂ふ。

五　我は聲をかぎりに叫べども、助けに來る人はなし。

六　蕾なほ綠なる女郎花は、力なき雨に打靡く。

七　よせくる波はあらくとも、汝等ひるむ事なかれ。

八　昆蟲は花の蜜に養はれ、花は昆蟲の媒介によりて實を結ぶ。

九　太陽西に傾けば、涼風そゞろに袂を吹く。

十　松風は源平對陣の昔を語るが如し。

第十三章　複文

(一)　花の散るは風これを誘へばなり。

(二)　余は遙に電光の閃くを見たり。

(三)　彼は殆人跡の到らざる地に草庵を結べり。

以上の文中、

花の散る

電光の閃く

人跡の到らざる

の三つは、主語客語或は修飾語の位置をしめて、單語の代用をなせるものなり。然して、これらは皆主語と述語とを備へたる單文なり。かくの如く、文が獨立を失ひて他の文の成分の位置を占むるものを句といふ。

主語述語の關係二回以上に及ぶものを複文といふ。前例の(一)(二)(三)は皆複文なり。

練習(一)　次の文中の句を指摘せよ。

一　余はこゝに中納言宗行卿の墳墓ありと聞けり。

二　歳寒うして松柏の凋むに後るゝことを知る。

三　彼は毫も船體の動くを感ぜざるものゝ如し。

四　魚は水の清きところにはすまず。

練習(二)　次の文につきて單文複文を區別せよ。

一　上杉武田は戰國時代の二傑なり。

二　北には中國の山系、蜿蜒として横たはる。

三　人の最も貴ぶ寶石は金剛石なり。

四　農家漁舍の隱見せる風景、いかなる人の筆にも及びがたし。

五　ある博物家は、海鳥の雛に游ぐことを敎ふるを見たり。

第十四章　文の成分の節略

多く聞きて少しく言へ。

この土手に上るべからず。

の如く、命令をあらはす文は、多く主語を省く。

いま富岳の絶頂に立つ。

大山元帥をして、滿洲軍總指揮官たらしむ。

の如く、主語にあたるもの說者自身なるか、又は一般に熟知せられたるものなるとき其主語を省く。

口は禍の門。(なり)

一寸の蟲にも五分の魂。(あり)

の如く述語を省くこともあり。また

彼も(我を)待たむ。

彼は(これを)事ともせず。

の如く客語を省くこともありと知るべし。

練習　次の文の省略せられたる成分をいへ。

一　勉强は幸福の母。

二　終日待てども來らず。

三　余は少しも知らざりき。

四　人の短をいふこと勿れ。

五　詔して皇室典範を定む。

第十五章　文の性質

石炭は、吾人の利用する天然物の中にて、最も要用なる物なり。

長良川の鮎は、香味殊に優れたるを以て名高し。

右の如く事物を説明するものを説明體の文といふ。

笛の主は誰ぞ。

汝何を以てか之を知る。

誰か彼の死を悼まざる。

の如く、疑問又は反語の意をあらはすものを疑問體の文といふ。

家の事はいさゝかも心配すな。唯國につくせ。

人の短をいふこと勿れ。己の長を説くこと勿れ。

右の如く、命令禁止の意をあらはすものを命令體の文といふ。

あゝ、何等の悲壯ぞ。

土人の境遇も亦慘憺たるかな。

の如く、感動の意をあらはすものを感動體の文といふ。

以上文に關して説明せるところを概括すれば左の如し。

主語
述語

文の成分
- 客語
- 修飾語
- 獨立語

文の構造
- 單文
- 重文
- 合文
- 複文

文の性質
- 說明體
- 疑問體
- 命令體
- 感動體

練習　次の文の成分構造性質を說明せよ。

一　風霜山を侵せば、林樹紅となる。

二　汝は何故に余の言をきかざるか。

三　滿洲の天候は常に寒暖相半ず。

四　國民がその國語を尊ぶことは一の美德なり。

五　誰か花を愛せざらむ。

六　鸚鵡はよく言へども、飛鳥たる事を離れず。

七　豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。

八　平生都にのみ住みなれたる人は、田舍を羨むなるべし。

九　この家僕は、主人の危險を救はむとて一命を捨て

たるなり。

十　誰か、この可憐なる王の末路に涙を濺がざらむ。

女子文法教科書下卷 終

動詞活用表

活用形	上一段活用									
	植	射	着	似	干	見	居	蹴	來	爲
未然形	ゑ	い	き	に	ひ	み	ゐ	け	こ	せ
連用形	ゑ	い	き	に	ひ	み	ゐ	け	き	し
終止形	う	いる	きる	にる	ひる	みる	ゐる	ける	くる	する
連体形	うる	いる	きる	にる	ひる	みる	ゐる	ける	くる	する
已然形	うれ	いれ	きれ	にれ	ひれ	みれ	ゐれ	けれ	くれ	すれ
命令形	ゑよ	いよ	きよ	によ	ひよ	みよ	ゐよ	けよ	こよ	せよ

活用形	下一段活用	加行變格活用	佐行變格活用	奈行變格活用	良行變格活用
	死	有			
未然形	な	ら			
連用形	に	り			
終止形	ぬ	り			
連体形	ぬる	る			
已然形	ぬれ	れ			
命令形	ね	れ			

動詞活用表

動詞／活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
四段活用						
行	か	き	く	く	け	け
押	さ	し	す	す	せ	せ
立	た	ち	つ	つ	て	て
問	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
讀	ま	み	む	む	め	め
知	ら	り	る	る	れ	れ
上二段活用						
起	き	き	く	くる	くれ	きよ
落	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
強	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
恨	み	み	む	むる	むれ	みよ
報	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
懲	り	り	る	るる	るれ	りよ
下二段活用						
得	え	え	う	うる	うれ	えよ
受	け	け	く	くる	くれ	けよ
寄	せ	せ	す	する	すれ	せよ
棄	て	て	つ	つる	つれ	てよ
兼	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ
添	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へよ
勤	め	め	む	むる	むれ	めよ
消	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
恐	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
植	ゑ	ゑ	う	うる	うれ	ゑよ
上一段活用						
射	い	い	いる	いる	いれ	いよ
着	き	き	きる	きる	きれ	きよ
似	に	に	にる	にる	にれ	によ
干	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
見	み	み	みる	みる	みれ	みよ
居	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
下一段活用						
蹴	け	け	ける	ける	けれ	けよ
加行變格活用						
來	こ	き	く	くる	くれ	こよ
佐行變格活用						
爲	せ	し	す	する	すれ	せよ
奈行變格活用						
死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
良行變格活用						
有	ら	り	り	る	れ	れ

佐加四　加佐下上下上下上谷自四

動詞と助動詞との連續表

其一

	未然形	助動詞	連用形	助動詞	終止形	助動詞	連體形	助動詞
四段	讀ま	る	讀み	た	讀む	べし	讀む	べし（まじ）
良行變格	有ら	す	有り	し		べかり（まじ）	有る	べかり（まじ）
奈行變格	死な	す	死に	ぬ	死ぬ	べし	死ぬる	べし（まじ）
上二段	起き	す	起き	ぬ	起く	べし	起くる	べし（まじ）
下二段	受け	す	受け	ぬ	受く	べし	受くる	べし（まじ）
上一段	着	す	着	ぬ	着る	べし	着る	べし（まじ）
下一段	蹴	す	蹴	ぬ	蹴る	べし	蹴る	べし（まじ）
佐行變格	爲（せ）	ら			す	べし	する	べし（まじ）
加行變格	來（こ）	ら			く	べし	くる	べし（まじ）
								なり（ごとし）

其二

	未然形	助動詞	連用形	助動詞	已然形	助動詞
四段	讀ま		讀み		讀め	り
加行變格	來（こ）	し	き	し（しか）	くれ	
佐行變格	爲（せ）	し（しか）り	し	き	すれ	

連用形に連る過去の助動詞「き」の活用「し」「しか」は、加行佐行兩變格動詞に限りて、上表の如く未然形につき、加行變格には連用形にもつく。又その活用「き」は、佐行變格の連用形にのみつく。

明治四拾四年拾月拾五日印刷
明治四拾四年拾月二拾日發行
明治四拾五年壹月拾貳日訂正印刷
明治四拾五年壹月拾五日訂正發行

女子文法教科書　全二册
改正定價　上卷金拾七錢　下卷金拾八錢

著者　關根正直
著者　古谷知新
發行者　大葉久吉　東京市日本橋區本石町三丁目拾七番地
發行者　吉岡平助　大阪市東區淡路町四丁目三十七番地
印刷者　青木弘　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所　東京市日本橋區本石町三丁目〔振替貯金口座〕東京二八〇番
關西專賣　大阪市東區淡路町四丁目〔振替貯金口座〕大阪四三番

東京寶文館
大阪寶文館

不許複製

印刷所　株式會社秀英舍第一工場